

平成 29 年度 自己評価表

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>○基礎基本の確立と意欲の涵養 ○社会人としての基礎力向上に向けた授業力の向上 ○進路保障と定着支援の充実</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 働く意欲や態度を高める職業教育の充実 2 人とのよい関係性や社会性を育む指導の充実 3 教職員の専門性や授業力の向上 4 教職員の対応力の向上 5 P T A活動の活性化</p>
---------------------------	---	----------------------	--

		年 度 当 初			評 価 結 果 (最終)		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 働く意欲や態度を高める職業教育の充実	新しい年次の進行による各コースの決定とその実施 (○学科部)	○選択方法を学科の枠にとらわれない自由度の高いものにしていく。コースによっては生徒数がかなり少ないコースもあり、3年次の選択時に、コース学習に支障のない人数が確保できるかどうか不安である。 ○選択時期が全コース体験途中での実施のために、選択のために情報が揃わないままの希望調査となっている。	○意欲を持って学べるコースを生徒が選択できる。 ○選択時に適正な人数となっている。 ○選択の参考となるよう、コースの特徴が分かるような行事を選択時期までに実施する。	○1年次の全コース体験を年内にできるローテーションを考案する。 ○専門成果発表会を12月中に実施する。 ○2・3年次のコース選択について、従前の希望調査表の様式を見直す。	○12月中旬に5コースの体験を実施できるように年間計画を修正した。 ○12月に成果発表会を実施し、3年生の取組の成果発表するとともに、1・2年生に情報提供することができた。 ○コース選択希望調査票の希望コース記入欄の見直しをした。	A	○進路選択・進路決定に有効となるように、所属コース以外での派遣学習ができるようなシステムも継続し、効果的な学習ができる体制を維持したい。
	働く心構えの指導 (外部講師の活用、進路担当者による指導) (○学年部、進路部、学科部)	○簡単に就職先が決まり働き続けられると思っている生徒もいるのが現実である。	○生徒が働き続ける上で自分の課題を知り、改善しようと取り組むことができる。	○外部講師による講演会を実施。 ○定着支援員や進路担当からの話を聞く機会を持つ。 ○ビジネスマナーの実施 ○現場実習の反省を基に自分の課題を明確にし改善に向けて取り組むための授業を行う。	○現場実習と関連づけて「働く心構え」の事業を行ったり、ビジネスマナーの授業を取り入れることにより生徒の働く意識が向上してきた。 ○進路部と連携し、自分の課題に目を向け、目標を持って実習に取り組めるようにした。前期実習では75%の生徒が達成感を感じており、後期は9割以上の生徒が自分の課題を改善したいと回答している。	A	○「働く心構え」の事業の継続と実態に合った内容の検討をする。 ○進路部の取り組み (現場実習に向けての学習等) 内容を確認し、精選する。
	専門教科の授業における共通目標の徹底 (○学科部、研究部)	○従前からの課題であるが、各コースでこの指導が徹底されていない現実があった。	○当該学年の共通目標について生徒・職員が認識し、年度末までに生徒の姿が目標に到達している。	○各コースの学習で「共通目標」を授業で使用する実習日誌に反映させる。 ○指導者は実習の振り返り時に、個々の到達度を生徒に伝え、指導する。	○各コースとも共通目標を意識した取組を継続することができた。特に1年生の学習においては、重点的に取り組むことができた。	B	○学年に応じた到達度をはっきり示した指導を徹底する。 ○専門教科の授業に特化した振り返り表 (全コース共通) を作成し、これを活かした指導を進める。
	「成果発表会」の充実実施 (学科部)	○実施3年目を迎え、生徒の理解や取り組み意欲は高まっている。	○1・2年生のコース選択の参考となるような発表内容や態度で実施できる。 ○落ち着いた環境で準備やリハーサルができ、当日の運営も生徒主体で実施できる。	○卒業前の集大成として意欲的に取り組む生徒の姿を引き出す。 ○余裕ある発表時間の確保及び運営役務の見直し。	○生徒の成長やコースごとの学習成果を発表することができ、1・2年生のコース選択の参考となった。 ○余裕ある日程設定により、準備・リハが落ち着いてでき、生徒主体の運営がしかりできた。	A	○各コースのテーマ設定・発表準備などを早期に共通理解し、計画的に準備ができるようにする。 ○進路先開拓も見据えて、企業への公開も検討をする。(平日か土曜日か)
2 人とのよい関係性や社会性を育む指導の充実	ソーシャルスキルを高める指導の充実 (○学年部、研究部、支援部)	○上手に自分の思いを伝えることができずトラブルになるなど対人スキルに問題のある生徒が多い。また卒業生の中にも対人スキルの問題で職場で孤立しがちな生徒もいる。	○ソーシャルスキルを高める指導法等について理解し、このことを意識した授業に取り組む。	○教職員対象の研修会を実施する。 ○自立活動の個別の支援計画を授業者全員で共有する会を持つ。	○エンカウンターなどを積極的に取り入れた授業が増えた。 ○自立活動の個別の指導計画を共有する会を持ち、生徒の対応に向けての共通理解が図れた。 ○自分の思いを相手に共感してもらえるように言葉で伝えられる生徒が増えてきた。	B	○継続的に指導方法を学ぶ機会を設ける。 ○自立活動の個別の指導計画を共有する会を3回実施する。
	個に応じた取り出し指導の充実 (○支援部、学年部)	○各学年部に支援部員を配置し、連携して指導を行っている。	○担任や学年団、寄宿舎とスムーズに情報共有し、的確に個別指導ができている。	○各学年部と支援部等が連携し、個への指導が必要な生徒に、抽出した指導を行う。	○個別のカウンセリングや、担任や学年、指導員中心とした取り出し指導を行い、対応の共有を図っている。 ○個々の情報共有後の支援策の実施にあたり、連携支援の在り方には改善の余地がある。	B	○生徒の課題や取り出し指導の経過など、継続して情報共有していく。 ○連携や支援等の課題について、日頃から支援部や学年で把握しやす環境作りをしていく。
	挨拶運動の実施 (○学年部、指導部)	○挨拶ができていない生徒がいる。いざとなったらできないという安易に考えていたり、自分に自信がなく声が出なかったりと様々な生徒の実態がある。	○6割の生徒が元気に挨拶をすることができる。	○「さわやかタイム」(月曜日)を実施。担任外による巡回指導実施。 ○挨拶のレベルアップ ○挨拶を評価し合う機会を持つ。	○生徒会の挨拶チェックや学年・学級での日常的な声かけを継続した。 ○挨拶の重要性を感じ、誰にでも挨拶しようと思えるようになった生徒が1割程度増加した。 ○専門教科の授業中など挨拶がよくできている場面もあるが、一日を通じてきちんと挨拶ができていると回答した生徒は44%に留まっている。	C	○教職員の挨拶がモデルであり、貴重な指導場面であると意識して、挨拶するのが当たり前な雰囲気作りを今後も継続して進める。 ○挨拶をする意味や、挨拶することによって育つ力を伝えていく。 ○生徒会とタイアップし地道に挨拶運動を進めていく。
	自治活動 (生徒会活動・寄宿舎自治活動) の活性化 (○指導部、学年部、寮務部)	○生徒会活動や学校行事等において年間を通じて生徒が活躍する場面が増えつつある。 ○寄宿舎改善のための意見箱に舎生から意見が出されつつある。	○生徒会活動で、企画や運営、司会進行等ができるようになる。 ○舎生が部屋会や意見箱を通して、自分たちの生活をより良くするために建設的な意見を出すことができる。	○生徒一人一人の役割を明確にし、見通しを持って活動できるように事前の打ち合わせや準備等の時間を確保する。 ○部屋会に参加する時の支援のポイントについて寄宿舎指導員全員で共通認識する。	○(生徒会) 担当者との十分な事前打ち合わせや準備等により、生徒一人一人が見通しや役割を意識し、自信を持って活動することができた。 ○(寄宿舎) 自治活動の手順について共通理解を図り、舎生から建設的な意見が多く出るようになった。意見に対して自治会として返答をすることで、全体会での話し合いも活発になった。	A	○(生徒会) 生徒会活動が自主運営できるように、担当者との事前打ち合わせ等を計画的に実施する。 ○(寄宿舎) 生徒主体の自治活動となるよう、意見の出し方、会の進め方などについて継続して取り組む。
3 教職員の専門性や授業力の向上	臨床心理士による講義・演習の実施 (○研究部、学年部)	○昨年度の琴の浦検証プロジェクトより、生徒のソーシャルスキルに課題があることが明らかになっており、早急な対応が必要である。	○ソーシャルスキルについて職員が理論的、実践的に研修を行い、日々の授業や生徒指導の中に生かすことができる。	○臨床心理士による演習や研修会等を計画的に実施し、職員が研修できる場を提供する。(「心の道場開設事業」として実施)	○外部講師を招聘し、ソーシャルスキルをテーマにした研修会を実施した。全職員が全ての授業の中で指導に活かすまでは至っていないが、ソーシャルスキルについて共通理解を図る良い機会となった。	B	○職員が共通理解を図りながら研修等が実施できるようにできるだけ早く計画を立案し、提案していきたい。
	授業研究会の実施 (○研究部、教務部、学科部)	○昨年度の琴の浦検証プロジェクトにより職業学科では働く心構えを培うために共通目標を持って取り組むこと、また、生徒にソーシャルスキルの力が培われていないことも確認した。	○生徒一人一人の実態やニーズを総合的に捉え、チームアプローチによる指導と支援をPDCAサイクルにて行い充実した職業教育を実践する。	○専門教科及び職業自立の授業を公開し、育てる力の共通理解を図る。 ○職員の専門性の向上を図るため職業教育及び発達障がいについての研修会を行う。	○10月と11月に授業公開を実施した。全ての職員が参観し、職業教育の授業力の充実を進めるよい機会となった。	B	○参観シートのより効果的な活用等、職員のニーズに応じた指導力の向上に向けて、研修方法について工夫していきたい。
	初任研等有効に活用した自主研修の奨励 (○研究部)	○昨年度より、初任者研修の一般研修に希望の職員も参加できるようにし、個々の職員にとって必要な研修が効果的に受けられるようにしているところである。	○全職員が、自分に必要な研修を選択して受講することができる。	○初任者研修等、様々な研修会の情報をできるだけ早く職員に提供する。	○定期的な初任研等の情報を掲示板に掲載し、希望者は随時、研修を受講している。	A	○来年度以降も継続して実施していきたい。
4 教職員の対応力の向上	対応力研修・コンプライアンス研修の実施 (総務部)	○昨年度、対応力研修の実施、日常的なコンプライアンスに関する情報提供などにより、法令等の共通理解や実践的な対応力についての理解が進んだ。継続した取組を行うことで対応力を向上させる必要がある。	○全職員が、学校現場における様々な事例を理解し、対応力研修等を活かして、的確な対応を心がけることができる。 ○教職員の服務や教育活動について、根拠となる法令や規約等を確認する習慣が身につく。	○年間3回の対応力研修で、実践的な演習を行う。 ○コンプライアンスに関するミニ研修を定期的に行い、情報提供を行う。 ○職員朝礼や終礼などを利用し、法令・規約などについての共通理解を行う。	○ミニ研修は2回しか実施できなかったが、職員朝礼などで情報提供に努めた。対応力研修は予定どおり実施し、教職員からも概ね好評であった。組織の一員であるという自覚や対応力の向上につながっていると考えられる。 ○掲示板を活用し、いつでも内容確認ができるようにしたことで、説明だけでは不十分な部分を補うことができた。	A	○具体的な事例をもとにした情報提供や、グループワーク、ロールプレイなどの演習を中心とした研修を継続する。
	様々な法令・規約等の共通理解 (総務部)					B	○継続して取り組みたい。
5 P T A活動の活性化	保護者のニーズの把握 (総務部)	○P T A活動への参加率が徐々に減少してきている一方で、進路や卒業後に向けての情報が少なく不安を感じているという保護者の声もある。	○保護者のニーズを把握した上でP T A活動を工夫し、保護者の満足度が向上している。	○ニーズ把握のための保護者アンケートを実施する。 ○アンケート結果や日々の保護者の声をできるだけ活かした活動を設定する。	○ニーズ把握のアンケートをもとにした来年度の事業計画を作成することができた。 ○ミニ研修等の参加者は毎回20~30名程度で、昨年度より増加傾向であった。参加者の満足度は高かった。 ○来年度の役員選考がスムーズに進んでおり、部分的ではあるが保護者交流は進んでいると思われる。	B	○保護者交流は進みつつあるが、多くは保護者同士の知り合いが少ないためにP T A活動に参加しにくいと感じていることがわかった。参観日等を活用し、学級内の保護者の交流をさらに広げられるよう努めたい。
	保護者研修会等の企画・開催 (総務部、進路部、支援部)	○就労の定着や卒業後の生活の充実のためには、今以上に保護者に対する情報発信が必要である。	○P T Aミニ研修・P T A通信で様々な情報発信が行われ、研修参加者が増加している。 ○P T A行事をとおして保護者交流が進んでいる。	○研修内容について学校からも積極的な提案をし、研修内容を工夫する。		B	